

新著紹介

印度哲學研究

文學博士 宇井伯壽著

「印度に關する諸方面の研究は文字通日進月歩といはるべき程で、特に最近著しく進歩したが、哲學に關する方面は比較的に後れて居る状態である。……然るに數年前から印度佛獨に於て印度學者の中に印度哲學の歴史的敘述を試みむとする傾向が明となり、既に二三其成果の公表せられたものも存する。……印度は一般に歴史的考察並に記録の缺けて居る點に於て有名であるだけに、諸思想の起源成形成達の年代的順序について諸學者の間に一致せざるものがあり、又此方面の研究の等閑となつて居るものも見受けらるゝ。且又諸思想に對する正確適切な理解、從つて諸思想相互の內面的關係を闡明する點に於て猶未だ遺憾な點が多々存する如く見ゆる。此等は殆ど創業期ともいふべき現今に於ては止むを得ないことではあるか、此等の點を確實に明にするでなくば諸思想の歴史的理解は到底望まらるべくもない。故に苟くも印度哲學の史的研究に従事するものには必ず常に此點に専心することを中心掛ければならぬ。予は現今の研究状態にいへば印度哲學といふもの

は印度哲學史を除いた何もものであることも出来ぬと信するから、予の平生の研究も全く此點に向けられて居る。」

斯ういふ巻頭の緒言に始まつた著者の態度は驚くべきほど武堂々たるものがあるではないか。研究は第一強い自信に立脚せれば不可ぬ。強い自信は異常な努力研鑽の結果でなくば得られない眞面目な學術研究書に眞面目な大抱負を述べられる大言壯語を聴くほど我々の耳朵に痛快に響くものはない。私は先づ著者の斯うした強い確信に敬意を表するものである。「今後まかゝる研究を繼續して或時期に至つて印度哲學史の一般的敘述をなすを目的として居る」そのことであるが、愈々健闘自重、以て世界の印度學界に時ならぬ怒濤波瀾を打ち起される日の一日も遅からんことを陛下ら祈つて止まぬ。

「今茲に出版する印度哲學研究はかゝるものを公にする予一個の發表機關として企てたものである。故に此書は今後予の草する研究論文を網羅せむとするから、材料の整頓次第、第二第三卷を繼續して刊行する豫定である。先づ其第一卷に於ては從來發表した諸論文を未だ公表せざる手控の中から取つて、十編としてこれだけを収むることにした。」之で以て本書の内容をなす十編の論文の性質が瞭然となつた譯である。「此中の各編が凡て煩瑣的なもので一部分に關するものが多いことは免れぬ」が然し之に就ては

著者獨特の意見がある。「我國に於ける印度哲學研究者の弊は徒に西洋思想を以て印度思想を解釋し彼此を比較し其一致を高調せむとすること、較もすれば著實精細な研究を怠つて濫に概括的に大觀論をなさむとすること」が最も著者の意に副はぬ所である。西洋哲學の研究は最近十五六年間の風潮變遷の結果、現今では全く面目を一新して著實眞學な眞の學者的態度で研究する風潮が澎湃として瀾つてゐるに拘らず、印度哲學の研究が十五六年の昔の西洋哲學研究の風潮に逆行してゐることは何と三思に値すべきことではないか。そこで「他の學者も今少しく此等の點を考へたならば左程に予を批評し非難し去ることは出來ないではなからうかと思ふ」と著者は謙遜してその立場を辯じておられる。そんなことは御遠慮にや及ぶ。學者は自個の見地を以て生涯を一貫するがその使命である。特殊専門の學を攻究するものは活ける國貨を以て自任する覚悟が必要である。宜しく自ら信する所に向て毅然に突進せられたいと私は信する。勿論著者の遜辭は若い初學者を督勵する訓誡であらうけれども、迷ふものがあつては學界の不利であるから一言註釋を施した所以である。

「茲に收めた十種の論文が幾何の價値あるものであり、又今後公にせむとするものが果して公表に價する程のものなり否やは一に讀者の判断を乞ふ外はないが、予としては多少の自信あるもの

なることをいふを許して頂きたい。言不遜に互るかは知らぬが十種の論文は凡て新しい意見を含み、學者の未だ曾て明にしなかつた點を明にして居ると思ふ。」然り、著者の此の言は眞に讃嘆に値する。斯うした新研究一而も大きなものを提へての小さな研究一がどしどし學者に依て公表せられ、初學者はその右論左説に眩暈して聊か亡羊の嘆を叫ばざるを得ないほど、新論文の讀破迎接に遑足らずといふほど盛大になつたならば、二千年來印度思想の感化に成つた我邦文化の中に住む我々の立場も多少先進學者に諒解される點が出來て來るかも知れない。此の第一卷の次に第二卷の佛教研究が既に公にせられたといふほどであるから、著者今後の活動こそ刮目して待つべきである。

遮莫、本書の内容をなす十種の論文とは、
第一、「唯識」の原語について。

第二、勝論正理兩派と吠陀並に聲常住論との關係。

第三、吠檀多經の源流及吠檀多學派の成立。

第四、正理學派の成立並に正理經の編纂年代。

第五、勝論經及び彌曼陸經の編纂年代。

第六、因明四相違の論理學的解釋。

第七、提婆の四百論と廣百論と百論。

第八、勝論學派の知識論

第九、羅睺羅即跋陀羅。

第十、史的人物としての彌勒及び無著の著述。

附錄 因明入正理論の西藏譯について。

さいふのである。一々の詳細について紹介する邊は到底ないが、簡短に要點のみを抄記して見ると、第一では「唯識」の原語が「毘若底摩咀刺多」であるといふ慈恩大師の記録について、如何にも *Vijñāna-mūlaka* の如く見ゆるが、實は *Vijñāpī-mūlaka* である所以を種々の資料から論じたもの、極めて専門的な小論文である。第二は勝論と正理學派との二派の年代や二派の觀たる吠陀觀を經中から論じたもので、「勝論哲學の遠き起原は釋尊時代の六師外道の時代、近き起原は紀元前二五〇——一五〇年迄頃、……一學派としての成立は紀元前一五〇——一五〇年頃、而して紀元二世紀の初頭には明に已に獨立の學派として特殊の學說を有することが認められ、他學派の人々に引用され又攻撃もせられて居る。又勝論經の成立は紀元一〇〇——二〇〇年の間即ち馬鳴より龍樹の活動期に至る間である」とし、正理學派が一派として成立したのは二〇〇——二五〇年であり、正理經の編纂は大體三〇〇——三五〇年の頃であると主張されてゐる。最も詳細に互つた長論編のやうに見える。第三は吠檀多經の内容を仔細に檢察して諸種の註釋を批評し、シヤンカラもラーマロージャも以て共に權威とするに足

らずまなし、本經ミチャンドーギヤ偃波尼沙土との關係を吟味し、進んで吠檀經の内容は紀元前三〇〇年頃よりありて學說の極めて多岐に互れるものであつた中一つが残つて現經となつたが傳説の如くバカラヤーナがその作者であるとは信ぜられない、寧ろ作者不明の經であると結論されてゐる。第四は正理學派についての研究で、正理經の成立は三〇〇——四〇〇年頃と定め、學派としての成立は少し前であらうと推定したもの。第五は勝論經の編纂を一五〇年頃と推定し、彌曼羅經のそれを一〇〇——四〇〇年の頃と想定した研究である。第六は國譯大藏經の「入正理論」序文にある如く、因明の四相違を現代的に判り易く解釋したるもの、第七は提婆の思想由来を論究してその著書に及んだもので、單編乍ら極めて重大な印度佛教思想史の全般に互つた高見が披瀝されてゐる。論說聊か煩雜に傾いてゐるが非常に我々を刺戟する暗示に富み、私の最も興味深く讀まして貰つた一篇であつた。第八は勝論學派の知識の中特に現量と比量との批評的研究を詳細に試みられしもの。第九は提婆の弟子羅睺羅と言はれる人の、西藏に所謂羅睺羅跋陀羅と同一人なるべきことを歸納的に證明した一篇で、中に智度論所引の嘆歎若偈と梵と和文との對照表が面白く載せられてゐる。第十は哲學雜誌上で公表せられた唯識派の開祖としての彌勒を史的人物と肯定した

論文で之には尙ほ今日議論のあるものであらうが著者は割合單簡に評し去つてゐられる。而して唯識派の三大立物たる三師の年代を定めて彌勒は二七〇——三五〇年、無著は三二〇——三九〇年世親は三二〇——四〇〇年位と見てゐられる。

大體斯んな内容をもつた専門的の書であるが、一般佛教學者にも極めて有益であるから切に愛讀をお勧めする。(菊版、凡四二〇頁、定價四圓五拾錢、東京市赤坂區青山町甲子社書房發行)(手島文倉)

(附記此貴重なる書の紹介の遅れたことを著者並に發行者へお詫びします。)

ヨハンネス
フォルケルト

悲劇美の美學

金田 廉 譯

本書はフォルケルトの *Der Symbolbegriff in der neuesten Ästhetik* 1876, *ästhetische Zeitfragen*, 1895 にいつて出版せし *ästhetik des Kunstschönen*, 1897, の第四版一九二三版の譯書である。本書の二版が出る一年前かの *System der Ästhetik*, 1901 の一巻が出た。そして三版が出る七年前に二巻が三年前に三巻が、出てゐる。Zwischen *Dichtung und Philosophie* 1908, *Kunst und Volkserziehung*, 1911, もみんなこの間の努力である。獨りこの本書のみが四版も版を重

ね、しかも割合に初期より最近に至るまでの彼の思想の里程標として版を重ねる毎に多少ではあるけれども重要な改訂を興へてゐる事は注意を要すべき事であらう。

アリストテレス以來、悲劇的なるものに關して多くの美學上の論争が繰返された、而してその多くは常に形而上學的論理的立場の相異より來る論争であつて、方法的立場の相異より來るものは少い。本書はその後者より來る興味ある研究の一つである。フォルケルト自身が第一版巻頭に云へる如く「この研究は美學上の文殊の著しき缺陷を滿す目的をもつてゐるものである」それがその目的を達したか否かは別として、彼は經驗心理學的立場に立つことによつてその豊富なる例證、その包括的なる視點をもつて從來の論理的狹量性より脱せんを試みた。従つてその材料の選擇に際して何等の豫想もなく、又その體系的根柢に一般に思惟の根本的傾向である處の畫一的なるものをも見ない。只ひたすらに心理學的であらうと努めてゐる事をそこに認める。自然、彼はその例證に於いて偉大よりも多數を、構成に於いて統一よりも多様を目標としなければならなかつた。

彼はすでに一版に於いて從來の人々の論理的根據としてゐたエスキロスよりクライストに至る代表的悲劇作家以外のいやくも悲劇の名のつく非常に多くのものについて説明と解剖を惜まな